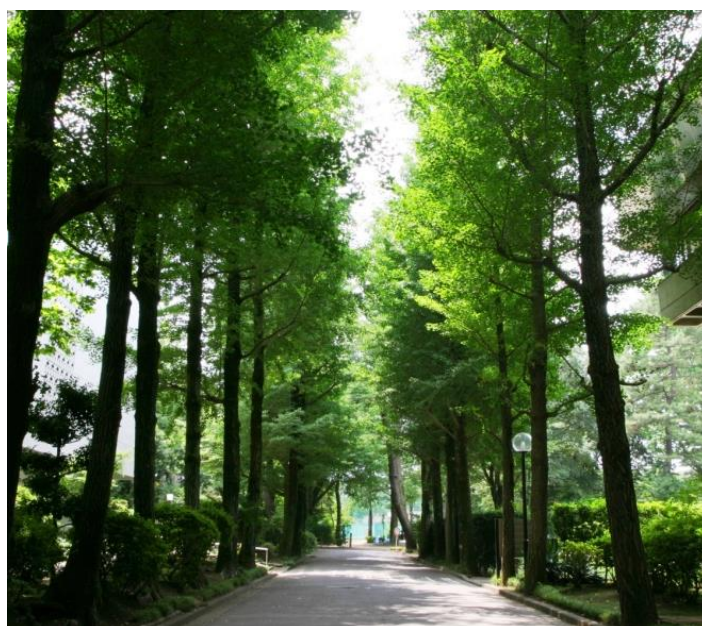


武蔵野大学大学院 人間社会研究科 人間学専攻 言語聴覚コース

武蔵野大学 専攻科(言語聴覚士養成課程)

第1回武蔵野言語聴覚カンファレンス



平成28年3月19日(土)

13時00分

武蔵野キャンパス 5号館 多目的ホール(グリーンホール)



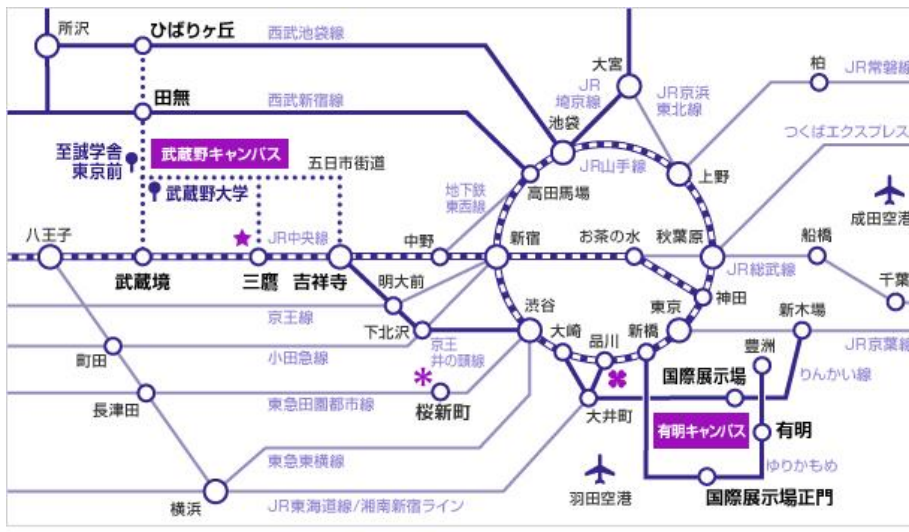
武蔵野大学
MUSASHINO UNIVERSITY

— Linking Thinking —

ご案内

【会場】 武蔵野大学 武蔵野キャンパス 5号館1階多目的ホール

■交通案内 〒202-8585 東京都西東京市新町1-1-20



★ 三鷹サテライト教室 ✳ 武蔵野大学附属 産後ケアセンター桜新町 ✳ 武蔵野大学 メディカルセンター

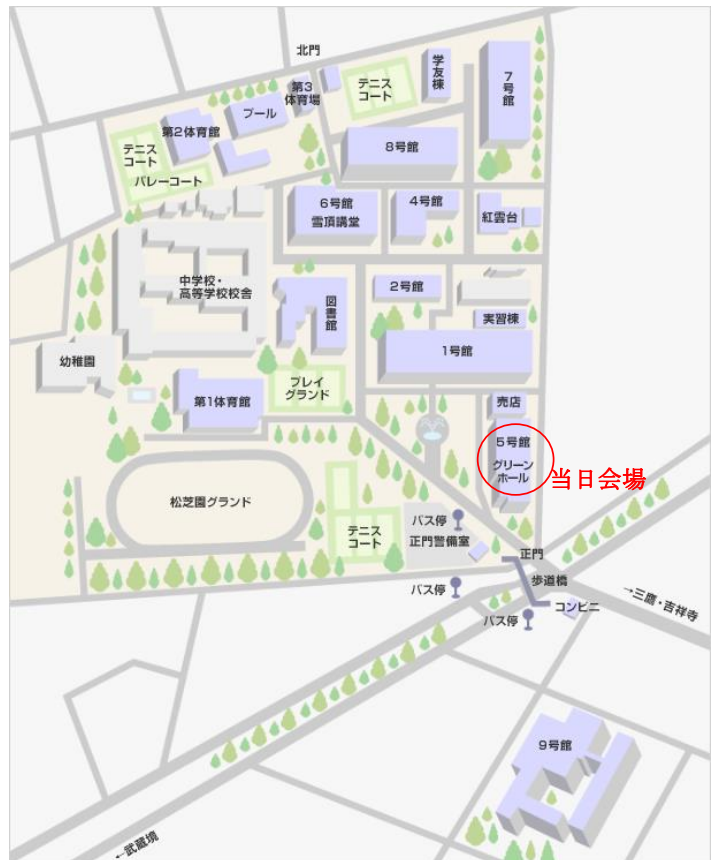
武蔵野キャンパス

■最寄駅からのバス乗り場

JR 三鷹駅	
北口 3 番乗場—「武蔵野大学」下車	
行き先	・武蔵境駅 ・武蔵小金井駅 ・ヴィーガーデン西東京 ・急行・武蔵野大学
JR 京王井の頭吉祥寺駅	
北口 1 番乗場—「武蔵野大学」下車	
行き先	・向台町 5 丁目 ・桜堤団地
JR 武蔵境駅	
北口 5 番乗場—「武蔵野大学」下車	
行き先	・三鷹駅 ・武蔵野営業所
西武新宿線田無駅	
北口 5 番乗場—「至誠学舎東京前」下車	徒歩 5 分
行き先	・武蔵境駅
西武池袋線ひばりヶ丘駅	
南口 1 番乗場—「至誠学舎東京前」下車	徒歩 5 分
行き先	・武蔵境駅・谷戸経由 ※ ・武蔵境駅・団地経由 ・武蔵境駅・南沢五丁目経由
※ ひばりヶ丘駅南口からは、谷戸経由が最も直線的に「至誠学舎東京前」まで来ます	



■武蔵野キャンパス案内



【受付】 受付開始 12:30

【参加費】 一般 ￥500 学生 無料

第1回武蔵野言語聴覚カンファレンスによせて

大学院 人間社会研究科 人間学専攻 言語聴覚コース 教授／専攻科長
小嶋 知幸

本日は、年度末でご多忙な時期の、しかも貴重な週末にもかかわらず、「第1回武蔵野言語聴覚カンファレンス」にお越し下さりまして本当に有難うございます。

ちょうど昨年今頃、本キャンパス内雪頂講堂におきまして、開設一周年記念シンポジウムを開かせていただき、歩み出したばかりの本学言語聴覚士(ST)養成コースを、是が非でも軌道に乗せたいとの思いを新たに致しましたのがつい昨日のことのようです。素晴らしいご発表で支えて頂きましたシンポジストの先生方、並びに当日お運び下さいました皆様に、改めて御礼申し上げます。

そして今年度から、1年ごとの成果を振り返り、諸先生方から御高評賜る場として、同時期にささやかなアニュアル・カンファレンスを立ち上げたいと思うに至りました。

内容についての具体的な企画に際し、4つの柱を立てました。1つめは本学の言語聴覚コースの特色である修士課程の成果発表です。当コースの修士課程のディプロマポリシーは、「言語聴覚士になって1年目から、スムーズに学術活動に入っていけるよう、研究の基礎力を養うこと」としております。したがって、現時点では十分な臨床研究にまではなっていないとは思いますが、どうか長い目でご指導・応援を賜りますようお願い申し上げます。2つめは昨年のシンポジウムにおいて、シンポジストの先生からもご要望を頂きました近隣の言語聴覚士の先生方による臨床研究報告です。気軽な意見交換のできる場にしたいとの思いから、この集まりを「学会・研究会」などではなく「カンファレンス」という名称にいたしました。そして、3つめが招聘講師による特別講演です。総合大学としての本学の魅力をお伝えしたいとの思いから、原則として学内の先生方に講師をお願いすることを考えています。記念すべき第1回を飾って下さる人間科学部の泉 宏明准教授は、霊長類の高次脳機能の研究者であり、当日のご講演が今から本当に楽しみです。最後に、4つめは交流です。プログラム終了後、粗餐をご用意させていただきました。短い時間ではありますが、近隣の先生方との交流を深めることができれば幸いです。

ようやく開設2年目を終えたばかりでございますが、今後とも武蔵野大学のST養成にお力添え賜りますようお願い申し上げます。どうぞ半日、楽しくお過ごしいただければと存じます。

第1回武蔵野言語聴覚カンファレンス プログラム

開会のご挨拶 (13:00)

武蔵野大学 小嶋 知幸

大学院修了生の研究報告 第1部 (13:05~14:05)

司会 小野 真理子

M1-1. 失語症者の漢字と仮名の読み誤りに関する基礎的検討—漢字の表音性に着目して

青山 周平

M1-2. 失語症者におけるパラ言語情報の理解についての基礎的検討

寺田 圭太郎

M1-3. 失語症者の発話に伴う身振りに関する基礎的検討

伊藤 敬市

休憩(10分)

大学院修了生の研究報告 第2部 (14:15~14:55)

司会 畠山 恵

M2-1. A Literature Review of Agrammatism in Chinese Language: From a Cross-linguistic Perspective

裴 雅蓮

M2-2. ディサースリア/運動障害性構音障害に対する統合的徒手言語療法の開発と
その治療効果の検証

樋口 直樹

休憩(10分)

一般演題(15:05~16:05)

司会 狐塚 順子

1. 進行性前部弁蓋部症候群を呈した症例

東邦大学医療センター佐倉病院 治田 寛之

2. 当院STにおける『がんのリハビリテーション』の現状と今後の課題

甲府共立病院 和泉 裕二

3. 音韻性短期記憶の低下による非語復唱の選択的障害と考えられた1例

イムス板橋リハビリテーション病院 上間 清司

4. 高次脳機能障害を呈した症例の復職支援について

小金井リハビリテーション病院 伊東 紗桜

休憩(10分)

特別講演(16:15~17:15)

司会 小嶋 知幸

「サルからみたヒトの音声・聴覚の特殊性」

武蔵野大学人間科学部人間科学科准教授 泉 明宏

閉会のご挨拶 (17:15)

武蔵野大学 小嶋 知幸

懇親会(17:20~18:50)

大学院修了生の研究報告

M1-1. 失語症者の漢字と仮名の読み誤りに関する基礎的検討—漢字の表音性に着目して

青山 周平

本研究は、失語症者の漢字と仮名の読み誤りから、漢字が表音文字として処理される場合の音読(意味/語彙情報に依存しない漢字の音読)が、二重経路モデル仮説で説明可能であるか検討することを目的とし、3つの音読課題を5例の流暢性失語症者を対象として実施した。実験1は漢字二字熟語の音読課題であり、同一漢字が典型読みされる条件と非典型読みされる条件で二字熟語を選定し、単語の心像性及び親密度を操作した刺激を作成した。実験2は、漢字非語(一字)の音読刺激を作成した。実験3は、仮名一字の音読刺激を作成した。症例ごとに正答率および読み誤りの質的検討を行なった結果、仮説に対する明確な支持的データあるいは反証データを得ることができなかったが、一部において、漢字非語(一字)音読良好・仮名一字音読良好・漢字二字熟語における類音性錯読、といった傾向を認め、表音文字としての漢字の音読処理が、二重経路モデルにおける仮名一字の処理と共通である可能性を示唆する反応パターンが観察された。

M1-2. 失語症者におけるパラ言語情報の理解についての基礎的検討

寺田 圭太郎

言語によるメッセージの発信と受信が障害される失語症者において、話者の音声の抑揚、強弱、イントネーションなどに込められたメッセージである「パラ言語情報」の理解は保たれるのか、それとも障害されるのかを明らかにすることを目的として課題を作成した。

結果として、聴覚的理解力が必ずしもパラ言語情報の解読能力を保障するものではないが、聴覚的理解力が低ければパラ言語情報の解読能力も低いことが示され、パラ言語情報の処理能力は、聴覚的理解力が保たれていることが必要条件ではあるが、十分条件ではないことが推測された。

また、会話場面でのパラ言語情報の解読には表面上問題はないが、課題では成績低下を示す症例については、音声による言語情報とともに送信されるパラ言語情報を同時並行で処理するだけのリソースがないことが推測された。

以上から、パラ言語情報の処理を成立させるための必要条件として「聴覚的理解力」および「言語情報とパラ言語情報を並行処理できるリソース」が、それぞれ組み込まれていることが示唆された。

大学院修了生の研究報告

M1-3. 失語症者の発話に伴う身振りに関する基礎的検討

伊藤 敬市

【はじめに】本研究は失語症者の「発話に伴う身振り(自発的ジェスチャー)」に注目した研究である。これは手話言語やパントマイム(道具を使うふり)とは異なる現象であり、語り手の認知状態との密接な関連性が明らかとなっているが、失語症者の自発的ジェスチャーはほとんど研究されていない。

【方法】4コマ漫画の説明課題を実施した。①成人健常者28名に典型的に見られる自発的ジェスチャーの収集を行い、これを比較材料として②失語症者2例のジェスチャーの記述的分析による事例検討を行った。

【結果】それぞれの失語症者のジェスチャーには、言語症状と類似するようと思われる要素が認められた。また、両事例において対話参与者との相互作用を通じ、発話およびジェスチャーの表現法や空間参照枠が明瞭化する様子が確認され、会話構造が発話および身振りの産出に影響を与えることが示唆された。

【臨床への展望】本研究は失語症者のコミュニケーションにおける発話やジェスチャーを解釈するための新しい枠組みを提供するものであり、コミュニケーションの改善や補償への寄与が期待される。

【MEMO】

大学院修了生の研究報告

M2-1. A Literature Review of Agrammatism in Chinese Language:

From a Ceoss-linguistic Perspective

裴 雅蓮

【背景】失文法は、提唱されて以来約200年、言語学や神経心理学など様々な分野において研究が行われてきた。しかし、各言語の特性および症状の個人差が存在するため、普遍的な失文法の定義は定められにくい。また、今までは欧米圏の言語、特に英語を対象とする研究が中心に行われてきたという点も否定できない。

【目的】本研究では、まず英語圏を中心とする当該領域のこれまでの研究を俯瞰し、続いて非英語圏での研究との比較を行い、さらに中国語の特性に焦点を当てた失文法研究を対照することにより、中国語の失文法のメカニズムに関する新しい視点を提供することを試みる。

【欧米圏言語および日本語における失文法研究】電文体、語順の障害、文法形態素の省略・置換、主要動詞の省略または名詞化などが、失文法の典型的な特徴として挙げられている。そのメカニズムについては、言語形式障害説と構文処理障害説の対立が長年にわたって存在している。一方、脳画像技術の使用により上前頭回の弁蓋部や三角部などが文の処理を担当すると提唱され、文法中枢と名付けられた。評価としては、VAST (the Verb and Sentence Test)と、NAVS (the Northwestern Assessment of Verbs and Sentences) などが作成されてきた。さらに、代表的な介入法として、TUF (Treatment of underlying forms)およびマッピング理論などが挙げられる。

【中国語における失文法研究】中国語では、文法要素の省略と構文の簡略化が失文法の特徴として強調されている。異なる文のパタン例えば、yes-no疑問文、「把(ba)構文」と「被(bei)構文」および従属節に対する理解と産生についての実験が行われているが結論を見るには至っていない。広州語話者の自発話を評価するCLCM (The Cantonese Linguistic Communication Measure) が出版されている。

【考察とまとめ】語順、V-N構造、アスペクト表現(「了(le)」、「着(zhe)」など)、lexical tone (声調)ならびに多数の助数詞などの言語特性に基づき、中国語における失文法の特徴をより具体的に分析し、そこから統一的な診断基準を定めることが期待されている。そして、その障害のメカニズムについては、中国語では英語に存在しない文構造が存在し、単語の構成などに関して欧米圏主流の仮説は必ずしも当てはまらない場合があるため、中国語の特性に焦点の置いた仮説の構築や評価法、介入法の提案はこれから重要な研究問題となるであろう。

M2-2. ディサースリア/運動障害性構音障害に対する統合的徒手言語療法の開発とその治療効果の検証

樋口 直樹

脳血管障害後の運動障害性構音障害(Dysarthria、以下ディサースリア)に対する新しい治療法として、統合的徒手言語療法(Integrated Manual Therapy for Dysarthria :IMSTD)を開発し、その治療効果を検証した。対象は10名の慢性期ディサースリア患者で、6名が脳血管障害であり、4名が脊髄小脳変性症である。治療効果の検証には、最大発声持続時間、単音発声(/a/)、そして音節の交互反復運動(/pa/、/ta/、/ka/)の3課題を施行し、得られた音声に対し音響学的解析を行った。治療後、最大発声持続時間、単音発声、および音節の交互反復運動(/pa/、/ka/)における音響学的解析結果が改善し、特に脳血管障害患者群でより効果が認められた。IMSTDは脳血管障害後のディサースリアに対して有効な治療法であることが示唆された。

一般演題 抄録

1. 進行性前部弁蓋部症候群を呈した症例

東邦大学医療センター佐倉病院
治田 寛之

【はじめに】進行性非流暢性失語(PNFA)の経過は多様であり、稀に前部弁蓋部症候群(Foix-Chavany-Marie syndrome; 以下FCMS)を呈し、重度の口腔期嚥下障害を生じる症例を経験する。今回我々は、PNFAの経過中にFCMSに類似した症状を呈した症例に対し、長期にわたり言語訓練、嚥下訓練の介入を行うことができたので報告する。

【症例】初診時76歳、女性、右利き、教育歴16年【既往歴】多発性脳梗塞、脳出血(発症日不明)【現病歴】X-5年、呂律の周りにくさを自覚する。X年、構音障害が悪化し日常会話に支障を生じるようになった為、当院神経内科受診。【入院時神経学的所見】軽度の努力性発声、発話失行。【入院時神経心理学的所見】WAB:AQ93.8、RCPM:25/36。ごく軽度の聴理解、語想起の低下。【画像所見】MRI:陳旧性多発性脳梗塞が散在、左淡蒼球に出血跡、前頭側頭葉および海馬の軽度萎縮。SPECT:左シルヴィウス裂周囲、左中心前回下部の血流低下。【経過】X+1年、WAB:AQ91.2。口舌顔面失行、音韻性錯書、文法障害(助詞の誤用、脱落)が出現。努力性発声が進行し非流暢性発話が顕著となった。X+3年、WAB:AQ87.8。努力性発声さらに進行し、口部顔面運動の意図性・自動性の解離がみられた。X+5年、WAB:AQ16.1。ほぼ発話不能の状態となり、錯書も顕著となった為、主にyes/noでの意思伝達を要するようになった。重度の口腔期嚥下障害と軽度の咽頭期嚥下障害により食事時間の超過、ムセがみられ、食形態・姿勢の調整を行った。【考察】PNFAの経過に伴い進行性のanarthriaを呈する症例は、後にFCMSの経過を辿り、口腔期嚥下障害を呈する可能性がある。ある程度の障害を予見し、言語機能面だけでなく嚥下機能面への長期的なアプローチを行うことでQOLの維持に努めることができると思われる。

2. 当院STにおける「がんのリハビリテーション」の現状と今後の課題

公益社団法人山梨勤労者医療協会甲府共立病院
和泉 裕二 野田 菜保子 手塚 仁美 北澤 萌

【はじめに】2014年度より医師の指示の下、がんのリハビリテーションを提供している。当院の言語聴覚士(以下ST)が介入する現状の分析より、今後の課題を検討したので報告する。

【現状】がん関連疾患入院数438名のうちリハビリ対象者は168名、うちST介入者は20名。平均介入時期は新規リハビリ処方28日後である。余命数週となつての介入では患者・家族の想いに寄り添い、経口摂取や発話に繋げるといった支援が行えない。

【まとめ】手術等の治療後に在宅生活に戻る患者への早期介入により、予後を考慮したセルフケア指導等を行うことができ、QOL維持・向上が期待される。臨死期の患者における関わりにおいても、患者・家族の想いを尊重し、最期まで食べることやコミュニケーション支援に繋げることが出来ると思われる。最後に、STの早期介入の重要性を発信し、システムとして定着させることが今後の課題である。

一般演題 抄録

3. 音韻性短期記憶の低下による非語復唱の選択的障害と考えられた1例

イムスグループ医療法人社団明芳会イムス板橋リハビリテーション病院 上間 清司
元田 桃香

失語例では、音韻性短期記憶(音韻性STM)障害と音韻障害の両者を区別して評価することは難しい。今回、主として音韻性STM障害により非語の復唱障害を呈したと考えられた症例を報告する。症例は、左被核出血にて失語を発症した60歳代の右利き男性である。発症後約3ヶ月時には、軽度失語へ改善した。単語復唱や呼称は保たれていたが、非語と文の復唱に成績低下を認めた。非語復唱では末尾の忘却(「ぶかぶ...」)を認めた。順唱は3桁、逆唱は3桁、音韻弁別と単音節の復唱、拍抽出・同定、単語逆唱、非語音読は良好であり、拍削除と非語逆唱で成績低下を認めた。音韻系列の自由再生課題では、視覚提示条件に比べて、聴覚提示条件で再生率の低下を認めた。また、聴覚提示条件では音韻類似効果の消失を認めた。これらの結果から、本例における非語の復唱障害は、主として音韻性STMの低下を反映していると考えられた。

4. 高次脳機能障害を呈した症例の復職支援について

小金井リハビリテーション病院
伊東 紗桜

今回、脳出血を発症し著明な麻痺を認めず、高次脳機能障害(失語症、注意障害、情報処理能力の低下)を呈した症例に対し復職支援を行なった。発症前は、妻(パート勤め)と子供2人(小学生)を養い仕事中心の生活で、脳出血発症は残業中の出来事であった。入院当初、妻は復職の希望が強かったが、症例自身は現状理解に乏しく無気力状態であり、職場復帰への意思が明確ではなかった。そのため、妻に対し可能な限りリハビリの見学と検査結果などの現状説明を行い、妻と共に症例に対して現状理解を促した。さらに、妻と協力し具体的に復職への道筋を示す事で現状への危機感を高めた。病態認識の獲得につれ障害受容の困難さを表した。訓練中の表情は硬く訓練内容の理解も得られない事が多かったが受容と共に意欲の向上を認めた。退院後は地域の職業リハセンターへ行き復職を目指す。復職へは症例自身の意欲や地域連携の重要性を再認識した。

特別講演

「サルからみたヒトの音声・聴覚の特殊性」

武蔵野大学人間科学部人間科学科准教授
泉 明宏

言語を持つことは、ヒトと他の動物を分かつ大きな特徴である。進化の過程で、どのようにして言語が成立したのか、議論が続いている。言語が音声や聴覚を基盤とすることから、音声・聴覚の特殊化が言語の進化において重要な役割を果たした可能性がある。本発表では、ヒトの音声・聴覚の特殊性について、ヒトと進化的に近縁なサル類を対象とした研究を中心に紹介する。

20世紀前半より、類人猿に言語訓練をおこなう試みがなされてきた。少なくとも音声言語について、このような試みはほとんど成功しておらず、数年にわたる訓練をおこなっても、音声の理解も表出も極めて限定的なものであった。一方で、手話や視覚性シンボルを用いた「言語」訓練においては、少なくとも音声を用いた場合と比べて相当に高いレベルでのコミュニケーションの成立が可能であった。これらの知見は、ヒトの発声・聴覚機能が他のサル類と比べて相当に異なっており、そのことが音声言語の獲得を可能にしていることを示唆する。実際に、サルの発声系については古くから検討がされており、ヒトの発声系の特殊化が様々な音を発声することを可能にしていると考えられている。また、言語獲得に必須である、音声学習をはじめとした発声の柔軟性については、サルではほとんどみられない。聴覚に関しては、聴覚的体制化の特性の違いや、サルにおける聴覚記憶の脆弱さが顕著である。聴覚的体制化や聴覚記憶に関する神経科学的理解は、種を問わず未だに限定的である。今後、この分野の進展により、言語の進化的基盤に関する理解が進むことが期待される。

[略歴]

泉 明宏(いずみ あきひろ)

国際基督教大学卒業

京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了

博士(理学)

京都大学霊長類研究所、国立精神・神経医療研究センター等を経て

現在、武蔵野大学人間科学部人間科学科 准教授

【武蔵野言語聴覚カンファレンス(MGC)事務局】

学校法人武蔵野大学 大学事務部 武蔵野学部事務室 言語聴覚事務担当

所在地: 〒202-8585 東京都西東京市新町1-1-20

TEL:042-468-3350(月～金 8:45～17:00)

Mail:speech@musashino-u.ac.jp

* お問い合わせはメールにてお願い申し上げます。

